

## Episode 6

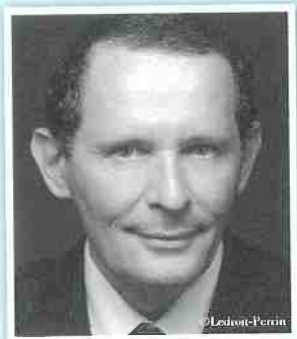
---

---

芸術は、  
人生や思考に  
秩序をもたらしてくれる。

---

---



ジェラルール・ベッケルマン *Gerard Bekerman*

---

保険貯蓄会社AFER (Association Française d'Épargne et de Retraite) 総裁。パリ大学経済学部教授および研究者。経済関係の著書も多数。パリ国際アマチュアピアノコンクール創設者。自身も活発な演奏活動を繰り広げ、リサイタルのほか、ラジオやテレビにも出演。バッハ、ショスタコーヴィチ、ガーシュウィン、ブーランク (2台ピアノ) の協奏曲などオーケストラとの共演も定期的に行っている。

<http://gerard-bekerman.fr/musique/>

## 経済学かピアノか？

私は現在、経済を専門とした仕事をしています。しかし、学生時代はフランスの偉大なピアニスト、アルフレッド・コルトーが設立したパリのエコー・ノルマル音楽院でピアノを学びながら、同時に経済学の勉強もしていました。

22歳になって、自分の職業を決めなければならなくなつたとき、父は経済の分野を、母は音楽の分野を選ぶことを望みました。難しい決断でした。どちらか一方を選択するのは私の望むところではなかったのですが、ポリーニ、シフラ、ペライアといったピアノの巨匠たちと自分を比べて、自分は経済を職業として選ぶほうが賢明だと思つたのです。

私は音楽のキャリアをあきらめ、経済学で博士号を取得し、パリ大学で教鞭をとり始めました。たしかに経済学は私に向いていたようで、今は73万人の契約者を抱える貯蓄保険会社AFERの総裁として仕事をしています。

音楽に比べて、金融業界での仕事は砂漠を旅しているように感じることもあります。朝目覚めたとき、自分が「会社の総裁」でしかなかったら……味気ないでしょうね。

## 賢く時間を使う

私は時間の使い方に対して厳格で、時間を無為に費やすのが嫌いです。1日は24時間ありますから、その間にたくさんことができます。私にとって睡眠はモーターでありエネルギーの源なので、睡眠時間は8時間必要です。では残り16時間をどう活用するでしょうか。私には家族もいますし、食事の時間も必要です。友情を育む時間もとても大切です。友人たちと会う時間もほしいし、ピアノも練習したいし……それに、仕事もしなければなりません。

私は仕事が速いほうで、要領よくてきばきこなすようにしています。早く家に帰ってピアノを弾きたい、ピアノが家で待っている！と思うからです。オフィスにも電子ピアノを置いていて、少しでも時間が空けば練習します。

自分の周囲を見ると、時間の使い方に対して無関心な人が多いと感じます。無



サルコジ元大統領を迎えてソルボンヌ大学で開催された公開討論会の様子。

為にだらだらと時間を過ごすのは残念なことですが、この問題は日常の習慣が原因かもしれません。フランスの哲学者、メーヌ・ド・ビランの書いた『思考能力に及ぼす習慣の影響』という素晴らしい本があるのですが、習慣の持つ大きな方のメカニズムについてわかりやすく説明しています。私の時間の使い方に影響を与えた一冊です。

### 無駄な時間は使えない

どの分野にも、天からの才能を授かった人がいます。音楽ではもちろんモーツァルト、ショパンなどいくらでも例を挙げられますし、友人のフランソワールネ・デュシヤールなども天才的なピアニストです。

日本には伊藤清（1915-2008）という素晴らしい数学者がいますね。「伊藤の補題 (Ito's Lemma)」という確率論の定理を考案した人です。彼の名前は現在、数学、経済、ファイナンス関係のあらゆる本で見ることができ、伊藤の補題は「オプション価格」を計算するモデルとして広く使われています。私にとって、天才とはそのような人です。

私は伊藤清のような天才ではありませんし、デュシヤールのような天性の超絶技巧に恵まれているわけではありません。ですから努力し、また練習するのみなのです。ピアノは週に15時間ほど練習しますが、無駄な時間は使いません。問題があればそれに向き合い、ひとつずつクリアしていくだけです。

### 音楽はコミュニケーションツール

私の音楽との出会いはピアノです。声楽家だった母の手ほどきで、私はしゃべり始める前からピアノを弾いていました。寡黙な子どもだったため、音楽は私にとって最初のコミュニケーションツールだったのです。

6歳のころでしょうか。母にバッハのインヴェンションを与えられたのですが、そのときにはまったく面白い曲だとは思いませんでした。母は私に早くから難しい経験に慣れさせようとしたのですが、私はもつと楽しい曲が弾きたいと思ったものです。正直なところ、10歳くらいまでは音楽のレッスンに関して良い思い出があるとは言えません。ソルフェージュのレッスンも厳しくて、あまり好きになれませんでした。

ピアノを弾くのが本当に楽しくなったのは13〜14歳のころです。そして面白いことに、そのとき喜びを覚えたのは、幼いころには退屈しか感じられなかったバッハの作品だったのです。6歳のときにはただ機械的に指を動かして弾いていたのが、思春期に入ってから気持ちを込めて弾けるようになったからかもしれません。



パリ・ソルボンヌ大学の講堂でオーケストラと共演。

私はバッハを愛してやみません。この世を去るときはバッハの腕に抱かれて旅立ちたいと思うほどです。私は几帳面な性格なので、バッハの音楽の規則性、組織的で論理的な書法に惹かれるのです。彼の音楽は出発点と到着点が明確で、統率力に満ちています。

同時に、バッハの音楽には非常に自由な精神もあり、ロマンチックだと思うのです。バッハはメロディの達人で、その音楽は歌心にあふれた対話だと言えるでしょう。バッハは懐深く、豊かです。それが、私がバッハに魅了されるもうひとつの理由です。

### 部をコントロールすることで全体を把握する

芸術は人生や思考に秩序をもたらしてくれます。人は筋の通った生き方をしなければなりません。私はこのことを子どものとき、音楽とともに学びました。

音楽には「流儀」があります。几帳面であること、計画的であること、細部を決しておろそかにせず、同時に全体が一貫していること。そしてこの流儀は建築、料理、手工業、そして数字の世界であるファイナンス……あらゆる分野に当てはめることができます。仕事をするうえで、なぜ私は問題解決能力に恵まれているのか、人間関係においてもなぜ物事をスムーズに運べるのか？ それは音楽を学び、楽曲を練習することによって培われた物事の見方や思考力のおかげかもしれません。

繰り返し返しますが、音楽は分かち合いと対話です。音楽の中にある対話に耳を傾け、それを感じ取っていると、人間関係における勘や空気を感知取る力も高まり、それがコミュニケーション能力につながるのです。

また楽譜を読んで演奏することで、分析能力も磨かれます。細部に対する注意を傳達させ、同時に全体を俯瞰する能力を与えてくれるのです。楽譜を分析するとき、最初に曲全体を見渡しますね。そしてそのあとに1フレーズごと、そして1小節ごとの

細部をチェックしていきます。音楽には、たったひとつの小節の中にも音符やリズム、休符といった情報だけでなく、あらゆるディテールが含まれているのです。

だから私はソルフェージュが好きなのです。ソルフェージュとは、楽譜を正確に読むために音楽理論を学ぶことです。人間で言うところの「骨格」が、音楽におけるソルフェージュです。音楽を理解するうえで鍵となるものですから、ソルフェージュを学ぶことはとても大切です。

音楽には「大体」とか「適当」ということがありません。曲は「細部」の組み合わせから「全体」が構築されているからです。つまり、細部を緻密にコントロールすることが、全体に一貫性をもたらす秘訣なのです。音楽は精神を整理整頓してくれます。

### 音楽から培われた仕事上の分析力

ファイナンス分野でも、音楽の勉強で身につけた「分析力」は大いに役立っています。

一例を挙げてみましょう。貯蓄の契約者は当然、貯金を増やすために一番高い利子を見据えて状況を分析し、このふたつの要素を適応させなければなりません。会社にとって望みますが、私としてはそれを適当にお約束するわけにはいきません。会社にとって実現可能なこととお客様にとって理想的なこと、要するに株価の動きといった利子の変動の原因となるパラメーターと、最高の利子を期待するお客様の気持ち。両方を見据えて状況を分析し、このふたつの要素を適応させなければなりません。

どのような些細なことも、確率論や決定論（注：確率論とは、不確定な偶然起こった現象を数学的に分析すること。決定論とは、あらゆる現象は起こる前からすでに決定されていると考えること）の法則に照らし合わせ、それを厳重に確認して決定します。どのような決定にも、細部の分析に基づいた理由があるのです。それがファイナンスにおけるソルフェージュです。基盤がしっかりしていないと何もできません。砂の上の家を建てるようなものです。

仕事においても、音楽から学んだ「流儀」は私にインスピレーションを吹き込んでくれるのです。

音楽には普遍性があり、それぞれの作品には尊重されるべきスタイルがあります。ショパンをショパン、ベートーヴェンをベートーヴェンのように演奏することこそが、音楽の文法に通じているということです。個人の趣味で勝手に好きなように弾くのは悪趣味です。趣味はその人の教養を表しますから。

だからといって、文法を尊重しているだけの学者風な演奏は最悪です。いくらテクニクが達者でも、そこに自由や魂や美しい音色がなくては音楽ではないからです。フランスの作家シャトブリアンの文法は、フランス語の文法学者のように完璧ではありませんが、文法学者は彼のような素晴らしい作品を生むことはできません。それと同じです。

ヴラディミール・ホロヴィッツとジョルジュ・シフラは、私にとって音楽の巨人です。彼らの演奏はそれぞれが強烈な個性で感動を呼び起こすと同時に、作曲家のスタイルを深く尊重しているからです。

### アンチ・コンクールの役割

私は演奏家の道をあきらめて、ファイナンスの世界に入りました。しかし音楽とかかわっていたという思いはどんどん募り、ついに「パリ国際アマチュアピアノコンクール」を創設するに至りました。私と同じ情熱を持つ世界中の方々に出会い、音楽を分かち合い、交流する場がほしかったからです。そして、私のようなアマチュアピアニストが演奏を披露できる場をつくりたかったのです。ステージでの演奏は私にとって一番の喜びです。

現代において、芸術家として生きることが恐るべき試練です。しかし、アマチュアには音楽でお金を稼がなければならないというプレッシャーがなく、自由なのです。

あなたが仕事をするうえで、あなたの競争相手は誰ですか？ おそらく同僚などの周囲の人たちだと思います。でも、このアマチュアピアノコンクールは違います。競争相手がいるとすれば、それは自分自身です。ここには「競争」の代わりに音楽への「愛」があります。自分自身でいることだけが求められ、批判もなく、敵もいません。いるのは音楽の仲間、音楽を生活の一部としながら、それを生活の手段としていない人だけです。アマチュアピアノコンクールはいわば、「アンチ・コンクール」なので

す。

発端は1989年、偉大なるピアニスト、アルトウール・ルービンシュタインの夫人アニエラに、アマチュアピアノコンクールを創設したいと相談したときのことです。彼女が「アルトウールがいたら、どれほど喜んだかしら！」と言ったことで、私の決意はかたまりました。彼女は以後10年間にわたって定期的に審査に参加し、情熱的にこのコンクールをサポートしてくれました。

このコンクールは2017年に28回目を迎えました。毎年、世界30カ国以上から医者、数学者、パイロット、トレーダー、弁護士、エンジニアといった音楽以外の職業の方、学生、専業主婦、定年退職者など、多彩な参加者が集まります。「対決」ではなく、「手を取り合うこと」が私たちのポリシーです。そのためコンクール中でも審査員にアドヴァイスを求めることが可能で、審査員は参加者が最良のコンディションで演奏できるように応援します。

画家のウジェーヌ・ドラクロワは「コンクールに関する私見」で「……冷静で、偏見を持たず、友人だからといって優遇せず、正当性と芸術のクオリティだけを求める審査員を見つけなければならない」という言葉を残しています。私たちのコンクールの審査員は、この理念に賛同する方のみで構成されています。優勝者には演奏会のオファーがあり、またオーケストラとの共演の機会も与えられます。アマチュアピアニストにとって、ピアノコンチェルトを弾くことは最高の榮譽ですから。日本からも毎年のように素晴らしい参加者をお迎えしています。

### 花を咲かせるのは自分自身

今やこのアマチュアピアノコンクールは世界的に知られるようになりました。21世紀はプロ、アマチュア関係なく、それぞれができることをしながら、音楽の普及と促進のためにイニシアティブの幅を広げていくべきです。

私はコンクールのほか、パリ大学内でのコンサート企画にも力を入れています。私が学生のころは素晴らしい時代で、大学でルービンシュタイン、カラヤン、シュワルツコップ、バーンスタインなど大音楽家の演奏会が催されていたのです。



ショスタコーヴィチのピアノ協奏曲を演奏中。オーケストラとの共演は至福のとき。

この伝統をよみがえらせようとアソシエーションを立ち上げ、医学部、経済学部などの学生のために、無料コンサートを提供しています。勉強の合間の気分転換にもなるでしょうし、また同じ世代の若者たちと交流することもできます。彼らの専門の学業にも、間接的に良い影響を及ぼすことでしょう。

プロの音楽家には重要なミッションがあると思います。それは教育です。私は教育の力を信じています。良い先生につくことは学ぶうえで非常に重要です。洗練された趣味も教育によつて培われるからです。人には皆、持つて生まれた才能や長所があります。しかし、それと並行して、教育によつて与えられたチャンスを生かし、まかれた種を咲かせる努力は、自分でしなければなりません。

## 21世紀の音楽の民主化のために

クラシック音楽は社会のひと握りの人だけに属するものではありません。フランスでは何世紀の間、音楽は王や貴族など一部の恵まれた階級のもでしたが、近年は音楽を民主化するために、さまざまな政治的努力がなされてきました。1970年代

から多くの公立音楽院が設置され、アマチュアのための音楽教育が重視されたのもその先駆けです。

最近は通行人が自由に弾けるピアノコーナーを設けている駅も増えました。庶民的な聴衆層をターゲットとして2015年にオープンした大ホール、フィルハーモニー・ド・パリ（注：音楽の民主化を目標とし、フランス文化省とパリ市が主な予算源となっているので、チケットもリーズナブルな価格で提供されている）も、比較的不便な立地にもかかわらず、今では毎晩のように盛況を博しています。幅広い聴衆を音楽に惹きつけるためには政府のバックアップが必要なのです。

これからは、郊外の過激派の温床となる恐れのある市、失業率が高く軽犯罪が多い市などでも、音楽を広めるためのアウトリーチ活動に一層力を注ぐべきだと思います。前述のピアニスト、フランソワール・デュシャールは、2003年に公式な国際舞台での演奏活動を引退したあと、常識にとられない演奏活動を繰り広げ、病院や刑務所でもボランティア活動をしています。彼こそ未来を見通す眼力のある人です。



今や大変な時代となってしまいました。世界情勢の雲行きも悪く、フランスは何年もひどく気流の悪いところを飛び続けている飛行機の中にいるような状態です。

かつて、ロシア、ドイツ、イギリスなどヨーロッパ他国の教養ある家庭の人は、皆フランス語が話せました。このことから伺えるように、フランスは国際的に「文化の見本」のような存在だったのです。21世紀の今では、フランス国内においてさえ、自国のアイデンティティが否定されつつあるように感じられます。

いろいろな生き方を選択できるようになった一方で、人々はますます個人主義になっていっています。そして社会が分裂した結果がイスラム過激派の増加や若者の犯罪につながっているのです。これは国が衰退しているというサインです。政治家も、選挙に当選することだけにきゅうきゅうとし、人々を先導することができません。

そんな政治家たちが、文化の力を過小評価しているのは残念なことです。こういう時世だからこそ、私は芸術やスポーツなどの文化が持つ普遍的な力、大勢の人々の心をひとつにし、上へと押し上げる強さが必要とされていると思うのです。こう考えれば、音楽は決して予算の無駄遣いではありません。音楽には、普遍的な価値観を見失

ってばらばらになりかけている社会を立て直す力があるのです。

### 濃密に生きるとは？

音楽は私の生きがいです。1日中、寝ている間でさえも音楽のことで頭がいっぱいです。無人島にひとつだけ持っていくなら何かと尋ねられたら……数学の本でも聖書でもなく、「音楽」と答えます。たとえそれが、孤独を強いられる苦しい決断だったとしても。砂漠を歩く旅人が水が必要とするように、ファイナンスの世界で生きるために音楽が私の水となり、エネルギーとなり、精神のバランスを保ってくれるのです。音楽の演奏には「精神」と「身体」というふたつの面があるように、私は音楽とファイナンスの二重生活を送っています。パリ国際アマチュアコンクールの仲間と同様、私は音楽への愛のために別の職業についているのです。

私の「1+1」は「1」、でもその濃度は2倍です。私はひとりの人間でありながら、この二重生活で人間としての豊かさを手に入れました。これは数字の世界を超越した音楽的、哲学的な思想なのです。

インタビューを終えて

Episode 6

Gérard Bekerman

# 『効率』

仕事とプライベート「切り替え」の美学



フランスではときどき面白い経歴の人に出会う。多彩な才能の持ち主、それもちよっと上手な趣味程度でなく、プロ同様の能力を備えた人だ。私の周りにも音楽関連で何人かいる。親が許してくれなかったので大学では薬学や法律、語学などを専攻し、その分野で優秀な成績を修め、資格なども取得する。しかし、音楽が好きでたまらなくて、並行してコンセルヴァトワール（音楽院）にも通い、結局音楽家を職業として生きることを選んだというのだ。国立美術学校を卒業してから日本語の勉強を始め、今では教材を出版するほどの権威となった友人もいる。ひとつの分野でプロになるだけでも大変なのに、これほど専門的な勉強を両立させ、また結果を出す彼らの才能やパワーには感嘆するしかない。

インタビュー中にベッケルマンが「経済が私を選んだのです」という言い方をした。誰にでも持つて生まれた性格や思考パターン、そしてそれほど努力しなくてもうまくできることといった個人の特性があるものだ。その特性にぴたりマッチした仕事の分野に出会える人もいるが、ベッケルマンの例を見ると、向いていることと本当に好きなことが一致するかどうかはまた別問題のようだ。

フランスの法定労働時間は週35時間（日本は40時間）、日曜営業が解禁になったのも最近のことだ。そんなこともあってか、フランス人は働くことが嫌い、と言われることもあるが、すべてのフランス人が苦役のように仕事をしているようには私には感じられない。嫌なことを続けるくらいなら、彼らは転職を

選ぶだろう。専門的な分野に携わる人は、皆それぞれ自分の仕事に情熱もプライドを持っている。定年退職した人が張り合いを失ってしばらくがっかりしていることも多い。

一方、「ヴァカンスのために働く国民」というのは当たっている。ここでの「ヴァカンス」という言葉は、必ずしも休暇を取って旅行に出かけることだけではなく、家族と一緒に過ごしたり、友達に会ったり、趣味に打ち込んだり、映画やコンサートに行ったりというプライベートタイムと解釈するのが妥当ではないかと思う。仕事は時間内でさっさと切り上げて、それ以後の時間は「精神的なヴァカンス」として別なことを楽しむという意味だ。フランスでは、時間をかけて仕事することとは美徳とされず、まず手早いことが基本だ。

綱渡りのような生活をしていても彼らが元気なのは、プライベートも充実しているからだろう。フランス人の時間の使い方はメリハリが利いている。

身近な例だが、私のピアノの生徒さんの中にも、仕事帰りに学校に子どもを迎えにいき、親子で前後してピアノのレッスンを受けるママやパパがいる。ほかに、家族で夕食を終えたあとにレッスンに訪れる大人の生徒さんもある。子どもが習っているのでピアノに興味があった、子どもと同じ習い事を共有したいというような気持ちでモチベーションとなり、レッスンを楽しんでいるようだ。1日の終わりに別なことをするというのは、疲れるどころか「疲労回復」になるらしく、その積極的な姿勢はいっつも見ても素敵だなと思

ないし、それが生身の人間性であると思っ  
ている。

ベッセルマンのように自分の能力に適していることを賢く見極めて職業とし、自分の大切なこととの関係をさらに貴重なものとする「二重生活」は、時間の使い方の達人だけに許される豊かな生活だ。「音楽」という充実したプライベートのおかげで、頭を仕事に奪われることなく適度な客観性と精神のゆとりを保ち、それが彼を優れた経営者とさせているのではないだろうか。

ベッセルマンとフランスの巨匠フランソワ・ワルネ・デュシャープルによる、プーランクの2台のピアノのための協奏曲を聴いたことがある。ベッセルマンは、アマチュアという言葉を使うのがためられるほどの腕前の

う。夫婦で家事や子どもの世話を分担し、お互いの自由時間を尊重し合ってこそ、実現できることだろうが。

日本、フランスに限らずよく言われるのが、好きなことを仕事に持ちなさいということ。もちろん、好きな仕事に没頭できるのはたしかに幸せに違いない。でも、別の見方をすれば、お金を稼ぐことは厳しい現実と直面することでもある。不平等もあるし公正でないこともある。自分の思い描いた仕事ばかりではないだろう。全身全霊で好きなことだからこそ、かえって失望や幻滅を感じることもあるかもしれない。「それに耐えられないのなら、それは本当に好きなことではない」という意見もあるだろうが、私は、好きならなんでも我慢できるほど人間は単純でも頑丈でも

持ち主だ。超絶技巧で鳴らしたデュシャープルとの共演も、彼は心から楽しんでいる。これほど濃密にピアノとの時間を生きられるのは何と幸せなのだろうか。



Gerard Bekerman